

4

献血推進に向けた職員の研修方法に関する研究

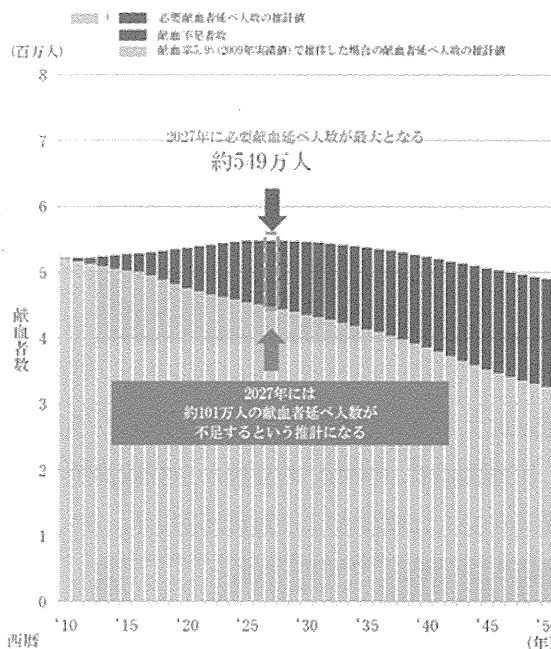
研究分担者：菅原 拓男（日本赤十字社 血液事業本部）
 研究協力者：照井 健良（日本赤十字社 血液事業本部）
 鹿野 千治（日本赤十字社 血液事業本部）
 木村 美羽（日本赤十字社 血液事業本部）

研究要旨

より安全な輸血用血液製剤を安定的に供給するためには、日常からより有効となる献血推進を展開する必要がある。近年は、特に若年層献血の減少、献血離れの現象があることが指摘されており、同研究事業では「供血者の実情調査と献血促進及び阻害因子に関する研究」において、その原因の解明を行い、献血推進に向けた戦略的な広報の開発研究に取り組んでいる。一方で、広報展開も含めたより有効な献血推進を継続的に実施し、目標を達成するためには、職員や学生献血推進ボランティア及び他の献血推進団体等のスキル向上が不可欠であり、理想的な研修モデルを構築し、継続的に実施していくことが極めて重要である。

研究目的

日本赤十字社が平成 22 年に行った血液需給将来推計シミュレーションでは、現在の献血率（献血可能人口の献血率 5.9%）のまま少子高齢化が進展すると、需要がピークを迎える平成 39 年（2027 年）には、献血者約 101 万人分の血液が不足することが予測されている。



今後、需要増加が見込まれる輸血用血液製剤の安定供給を確保するためには、献血者に対してより快適な環境を提供し、安全性を確保する観点からも、献血者と身近に接する全国の赤十字血液センターの

献血受付担当職員や献血後の対応をする接遇担当職員のスキル向上を図る必要がある。

また、近年献血者数の減少傾向が続いている若年層（10代・20代）への取り組みとして、同世代からの献血啓発等の働きかけを強化し、献血行動へ繋げることにより、将来の献血基盤を構築することが喫緊の課題であることから、全国的に組織されている学生献血推進ボランティアを対象として、献血推進活動に有効となる研修モデルを構築することが極めて重要であり、本研究の必要性は高い。

研究方法

- (1) 平成 21 年度
- ① 全国の赤十字血液センターにおける献血受付担当職員や献血後の対応をする接遇担当職員を対象として、「平成 21 年度全国赤十字血液センター業務（受付）担当職員研修会」（平成 21 年 12 月 21 日（月）、日赤本社、64 名参加）を開催し、外部講師による献血者とのコミュニケーション技術の向上を図った。（研修項目）
- ・職員としての事前準備
 - ・新規献血者の受付
 - ・再来献血者の受付
 - ・献血者の接遇
 - ・複数の献血者が来所した場合の対応
 - ・献血が不適となった場合の対応
 - ・待ち時間が発生した場合の対応

- ② 学生献血推進ボランティアへの取り組みとしては、若年層に献血の意義を伝え、献血行動を促すことを目的に日本赤十字社が展開している全国統一キャンペーン「LOVE in Action プロジェクト」(第 1 期, 平成 21 年 10 月～平成 22 年 6 月)において、学生献血推進ボランティアが所属している各地域における若年層の献血推進活動の一助となるように、全国の各地域(札幌, 仙台, 愛知, 大阪, 岡山, 福岡, 沖縄)で開催するご当地イベントへの直接的な参画を促した。

(ご当地イベントへの参画:福岡)



(2) 平成 22 年度

- ① 「平成 22 年度全国赤十字血液センター業務(受付)担当職員研修会」(平成 23 年 2 月 8 日(火), 日赤本社, 61 名参加)を開催し、献血者とのコミュニケーションにおける更なるスキル向上を図った。

(ロールプレイング研修項目)

- ・接遇の質を均一にする
- ・コミュニケーション力(聴く力、伝える力、質問力)の強化
- ・新規献血者の受付
- ・献血不適者への対応

- ② 学生献血推進ボランティアについては、「平成 22 年度全国学生献血推進代表者会議」(平成 22 年 8 月 9 日(月)～11 日(水), 宮城県仙台市, 85 名参加)を開催し、病気やケガのために輸血を受けた患者さんや、そのご家族の声を伝えることにより、血液製剤がこれを必要とする患者さんへの医療に欠くことのできない有限なものであることを含めた献血思想の普及啓発を行い、意識の向上を図った。

(研修素材:献血推進映画「八月の二重奏」)



*献血された血液がどのように使われているのかを表現した

映画(実在の学生献血推進ボランティアさんが題材)

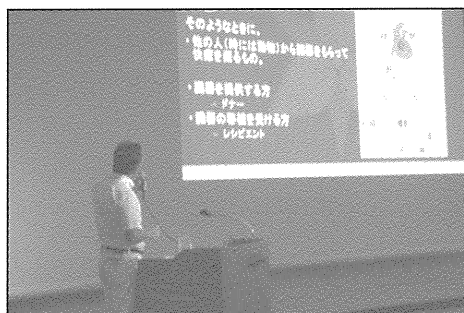
(3) 平成 23 年度

当年度においては、全国的に組織されている学生献血推進ボランティアに特化した形で、研修モデルの充実を図り、より能動的かつ有効な献血推進活動に繋げるために以下の取り組みを行った。

- ① 「平成 23 年度全国学生献血推進代表者会議」(平成 23 年 8 月 10 日(水)～12 日(金), 北海道札幌市, 90 名参加)において試行的に実施した。
- ② 採血事業者である日本赤十字社から、献血の現状とこれからの献血推進広報のあり方等の情報提供をした。



- ③ 献血により支えられている輸血医療という視点で、医療関係者(医師)の立場から肝臓移植手術映像等を交えた講義および質疑応答を行った。



④ 学生献血推進ボランティアが、全国各地域で開催している有効な献血推進活動の中で、特に学内での活動に係る情報提供を共有し、今後の活動の一助とした。

⑤ これらを踏まえて、同世代をターゲットとした今後の献血行動に繋げるための効果的な推進活動について、献血行動を阻害する要因を抽出してもらい、効果的な対応策をグループ討議により導き出し、意見交換を行った。

(献血行動を阻害する要因)

- ・興味がない
- ・注射が嫌い
- ・時間がない
- ・一人で献血する勇気がない
- ・献血の知識がない



研究結果

(1) 平成 21 年度

① 献血受付担当職員や献血後の対応をする接遇担当職員を対象としたコミュニケーション技術の向上について、特に接客話法の実習やクレーム対応のシミュレーション研修等により、職員に求められる考え方と行動のあり方を学習し、基本的な接客マナー等を習得した。

② 学生献血推進ボランティアが、全国統一キャンペーン「LOVE in Action プロジェクト」へ直接的に参画することで、自らの活動実態を積極的にPRするとともに、献血の実情をより理解できたことで、自主的な活動意識が生まれてきたものと考えられる。

(2) 平成 22 年度

① 献血受付担当職員等を対象とした献血者とのコミュニケーションにおける更なるスキル向上について、特に献血者との良好な関係を構築するための対応として、ロールプレイング研修により、職

員に求められる考え方と行動のあり方を学習し、今後の献血者に対する対応の質的向上が期待された。

② 学生献血推進ボランティアを対象に輸血医療の現状について情報提供をしたことにより、献血が患者さんの命を支える尊いものであることを含めた献血思想の普及啓発が図られ、意識の向上に繋がった。

(3) 平成 23 年度

学生献血推進ボランティアに特化して研修モデルをより充実させ、グループ討議により導き出された効果的な取り組みの概要は以下のとおりである。

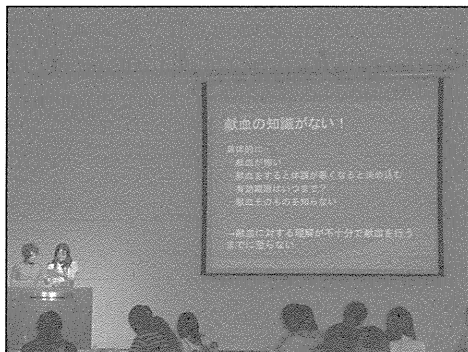
- ・同世代への有効な情報提供として、健康管理に役立つ（生化学検査結果のお知らせ）情報、献血基準や輸血医療の現状等の情報を Twitter 等のソーシャルメディアを活用し、発信する。
- ・若年層献血者を対象に献血紹介カードを配布し、友人や知人の献血や複数（カップル等）での献血を誘導する。
- ・ボランティアが献血後の達成感や体験談等を伝えて前向きなイメージを持ってもらう。
- ・輸血を受けた患者さんからのメッセージや血液の使い方や様々な手段（ポスター、TV、ラジオ、学生献血推進ボランティアによる講義、メーリングリスト、DVD 等）で認知してもらう。
- ・献血の現状や重要性を幅広く発信する（mixi や Twitter を利用）。
- ・メーリングリストでの献血協力を伝達し、協力を求める。



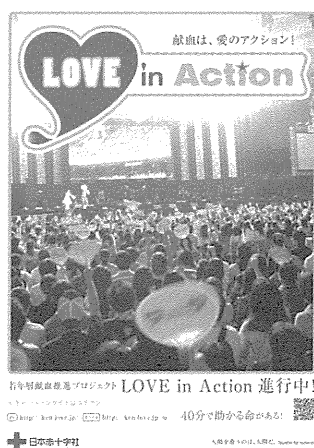
- ・mixi、Twitter および iPhone アプリ等による献血ルーム所在地や献血バス運行予定、献血受付から終了までの所要時間等の情報提供。
- ・QR コードを利用した献血予約システムの構築。
- ・学生献血推進ボランティアの活動を知ってもらい、

献血を身近に感じてもらう（Twitter やブログでの日常的な広報）。

- 他の献血推進団体との情報共有。
- 献血ルームや献血バスの雰囲気等を学生献血推進ボランティアの笑顔を変えて分かりやすく伝える。



- 献血可能年齢や献血間隔等、献血基準のポスターを作成し、化粧室やエレベーターの中、また電車やバス内等、特に目に付く場所に掲示する。
- 献血推進キャンペーン（LOVE in Action プロジェクト）映像や中高校生向けの献血セミナー映像をコンビニのレジ画面、映画館の上映待ち時間、podcast 等のインターネットラジオ、動画投稿サイト等で発信する。



- 献血に対して抱かれているマイナスイメージを払拭するため、学内で献血推進キャンペーン（LOVE in Action プロジェクト）映像を放映、または講演会を実施する。
- 献血キャラクター“けんけつちゃん”のアニメを作成し、TV等で放送する。



- Twitter や mixi 等の SNS や携帯 HP で献血の広告を表示させる。
- 人気漫画家による献血を題材にした漫画を献血 Walker に掲載する。



考察

- ① 職員を対象としたコミュニケーション技術の向上については、職員に求められる考え方と行動を身につけることにより、献血者の満足度を高め、結果として次回の献血に結びつける（複数回献血への誘導）ためにも必要な方法であるものと考えられる。
- ② 今後も重点的に取り組む必要のある学生献血推進ボランティアを対象とした方法は、将来の献血基盤となる若年層への献血の意識付け（特に献血未経験者へのアプローチ）を図るためにも、中長期的な視野で実施することが重要である。今回、学生献血推進ボランティアから導き出された同世代への献血に結びつける効果的な取り組みとしては、
 - 若者が現在利用している情報入手媒体に対応した戦略的な広報の重要度が極めて高く、気軽に目に触れる機会を増やすためのより有効な情報発信方法であること。
 - 一方で、各自の創意や工夫により、身近に対応可能と思われ、かつ実効性の高い具体的な方策も示されたこと。
 であり、個々の意識のさらなる向上や、全国的な組織として、連携して積極的に取り組む姿勢が認められた。

結論

献血受付担当職員及び接遇担当職員は、献血者とのコミュニケーション技術を向上させるためにも、継続的に研修を受け、如何に実践で活かせるかが重要である。また、職員の応対に関する顧客満足度の観点からは、アンケート調査等による効果測定を実施し、その後のスキルアップに繋げ、反復していかなければならない。

一方、学生献血推進ボランティアは、若年層へ向けた同世代からの情報発信を行う意味においても極めて重要な位置付けにある全国ボランティア組織である。現在、日本赤十字社が継続的に展開している全国統一の献血推進キャンペーン「LOVE in Action プロジェクト」への学生献血推進ボランティアの参画等は、将来の献血基盤となる10代・20代の献血推進を行っていく上で必要不可欠なスキームであり、今後、より有効な研修モデルを中長期的な視野に立って構築し、その活動を支援していくことが必要と考える。

健康危機情報

該当なし

知的財産権の出願・取得状況

該当なし

研究発表

該当なし

5

若者における献血意識と献血行動の促進および阻害因子に関する研究

研究分担者：田辺 善仁（株式会社エフエム大阪 代表取締役社長）

小野田敦乙（株式会社エフエム大阪 プロジェクトプロデューサー）

研究要旨

近年、若者の献血参加が著しく減少しており、少子高齢化による献血者人口の減少も含め、今後の日本における血液事業、医療現場に影響をもたらす要素となりつつある。

本年度で3期目をむかえた日本赤十字社主催の若年層への献血推進キャンペーン「LOVE in Action」の広報メディアとして、全国（ジャパンエフエムネットワーク 38局）で献血に関する広報を実施した取り組みと効果を発表及び検証いたします。

日本赤十字社の主催する献血推進キャンペーン「LOVE in Action」のラジオ番組（JFN38局全国放送）に寄せられたコメントを元に分析。

また、対象者が周囲を気にしたコメントを避けるため、プライバシーを考慮したラジオメディアを使用した。

研究目的

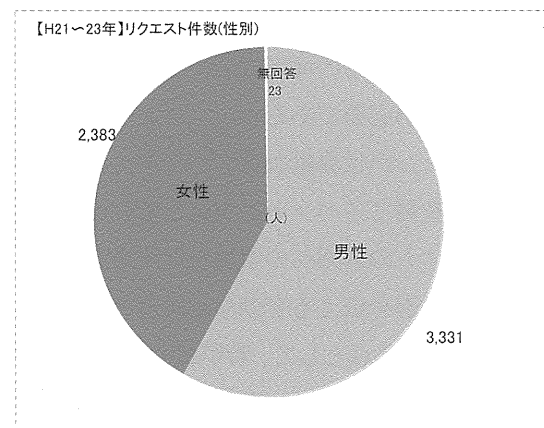
近年、若者の献血参加が著しく減少している事を受け、ジャパンエフエムネットワークの全国38局のネットワークを通じて、各ラジオ局とエリアにおける日本赤十字社血液センターと連動しての各エリアキャンペーンを元に献血推進における献血促進行動及び阻害因子を研究。

クwestより調査し、3年間のデータを集積。

総リクエスト数 5737 通。

結果

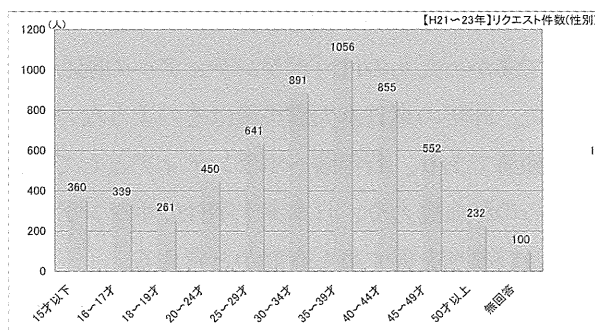
性別



対象と方法

対象ラジオ局（TOKYO FM、FM OSAKA、FM 福岡、FM 長崎、FM 佐賀、FM 熊本、FM 仙台、FM 山形、FM 福島、FM 新潟、FM 石川、FM 富山、広島 FM、FM 岡山、FM 愛媛、FM 高知、FM 香川、FM 徳島、FM 福井、FM 岐阜、FM 長野、FM 群馬、FM 岩手、FM 青森、FM 栃木、FM 秋田、FM 沖縄） ※現時点も推進中。

年代別

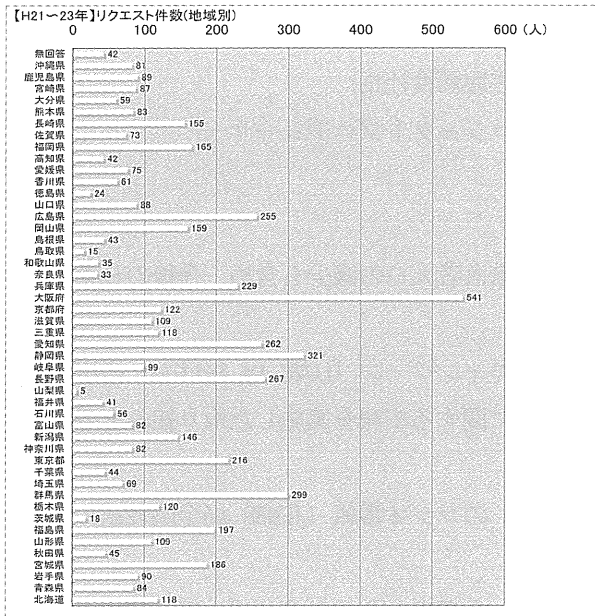


日本赤十字社の主催する献血推進キャンペーン「LOVE in Action」のラジオ番組（JFN38局全国放送）同番組パーソナリティであり LOVE in Action に関わる山本シュウ、小林麻耶を司会に各ラジオ局パーソナリティ、賛同アーティストやタレントが参加し、献血推進コーナーを実施。

調査方法

期間中、日本赤十字社の主催する献血推進キャンペーン「LOVE in Action」のラジオ番組へ届いたり

都道府県別



次に、地域別に見ると、西日本エリアからの反応が多く見られた。パーソナリティの認知度が西日本で高い事とその要因かと考えられる。この反応の高さを首都圏にも移行させるような対策（企画）が必要である。

健康危険情報

該当なし

知的財産権の出願・取得状況

該当なし

研究発表

該当なし

考察

3年間のデータの集積から各項目をみると、まず、年代に関しては「35～49歳」からのコメントが多く、次に「30～34歳」、「45～49歳」と現在、献血に協力を頂いている世代からの反応が高く見られた。

全体的に若年層からの反応は低いため、今後より若年層への推進が必要である。

本キャンペーンが世界献血者デーに多くのアーティストの賛同を得てイベントを実施している、これらのアーティストの番組への参加を促す事が今後、若年層に献血推進を伝える有効な手段と考える。

また、特筆すべき点として、若年層の中で15歳以下からの反応も高く、コメントを見ると「まだ献血が出来ないけれど、献血が出来るようになったらボランティアに協力します」など、献血に協力できない年代に一定の啓発が出来た事は有用である。

献血に協力できない年代層を含め、若年層のコメント例で多かったものは「ボランティアへの関心」であった。昨年の東日本大震災後はそのようなコメントは顕著であり、若年層へボランティアとしての視点からの献血協力や、日本赤十字社のボランティア活動及び参加を促す事も有効かと考える。

若年層の関心を今後も確保する事で、今後の課題である高齢化社会、少子化社会に向けた献血協力者の減少に対し、効果的な策であると考えられるため、継続的な献血推進が求められる。

6

献血推進施策の効果に関する研究

研究分担者：田中 純子（広島大学大学院医歯薬学総合研究科 疫学・疾病制御学）

研究協力者：石川 隆英（日本赤十字社 血液事業本部）

菅原 拓男（日本赤十字社 血液事業本部）

照井 健良（日本赤十字社 血液事業本部）

小田 奈央（広島大学大学院医歯薬学総合研究科 疫学・疾病制御学）

岡本 健吾（広島大学大学院医歯薬学総合研究科 疫学・疾病制御学）

秋田 智之（広島大学大学院医歯薬学総合研究科 疫学・疾病制御学）

研究要旨

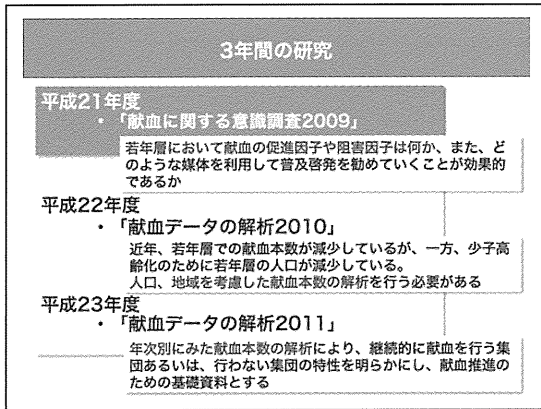
本研究班では平成 21 年度は「献血に関する意識調査 2009」、平成 22 年度は「献血データの解析 2010」、平成 23 年度は「献血データの解析 2011」を行った。

「献血に関する意識調査 2009」では、献血の推進要因や阻害要因は何か、またどのような媒体を利用して普及啓発を勧めていくことが効果的であるかを探究するために大学祭および献血ルームでアンケート調査を行った。その結果、献血未経験者は献血に対する知識、イメージが不足していること、初めて献血をする理由は「きっかけ」、「奉仕の精神」を挙げる者が多い傾向があった。このことから、献血未経験者には献血に関する情報や意義を的確に提示することが重要であり、広告媒体はテレビやラジオなど幅広い世代にアピールできる方法が特に有効であると考えられた。

「献血データの解析 2010」では若年層での献血状況について、少子化を考慮した解析を行った。平成 20 年度・21 年度の年齢階級別にみた献血本数を比較すると 10 歳代・20 歳代は減少、30 歳代以降の年齢階級では増加傾向があった。ところが、献血本数を年齢階級人口で除した「単位人口当たりの献血本数」を算出すると、20 歳代の単位人口当たりの献血本数は増加していることが明らかになった。さらに、20 歳代への献血の働きかけが、次年度の献血本数増加にも影響を与えていることが示唆された。また、10 歳代の単位人口当たりの献血本数は減少していたものの、月別変動には学校行事と大きく関連していると思われ、学校との連携が必要であると考えられた。

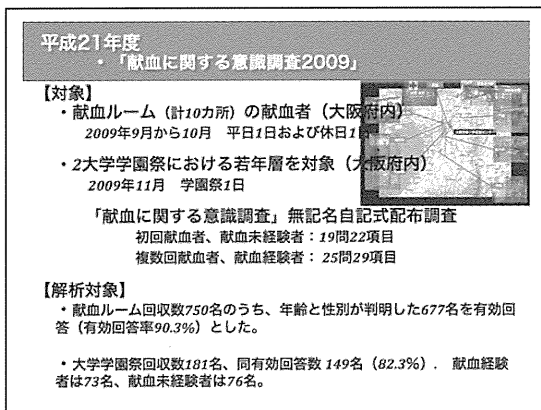
「献血データの解析 2011」では献血を継続する集団の特性を明らかにするために平成 20 年度からの 2 年間、および平成 18 年度からの 5 年間の全献血者を対象とした解析を行った。その結果、献血を継続する集団の特性は「献血回数は年に 2 回以上、男性、再来献血、中高年齢層」であった。但し、初回献血者に限定すると献血継続率に性差や年齢階級による差はあまりなく、初年度の献血回数の方に大きな違いがみられ、2 回以上献血をした層の継続率が高かった。これらのことから、若年の初回献血者に初年度に 2 回以上献血をしてもらうキャンペーンが献血継続・将来の献血本数確保のために有効であると考えられた。

研究成果

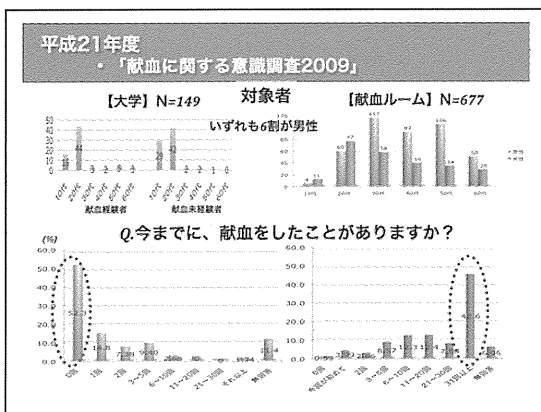


1) 「献血に関する意識調査 2009」

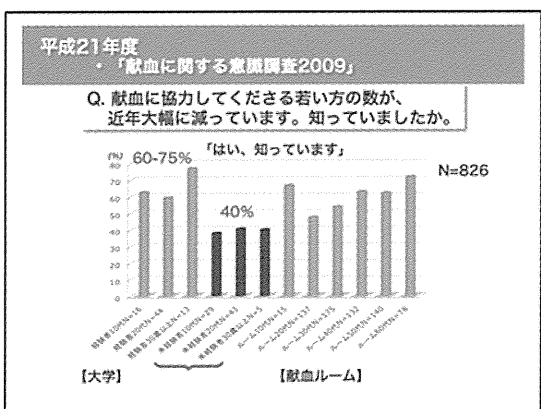
平成 21 年度は「若年層において献血の促進要因や阻害要因は何か」を探求するために、献血ルームおよび大学祭で献血に関するアンケート調査を行い、結果について考察した。



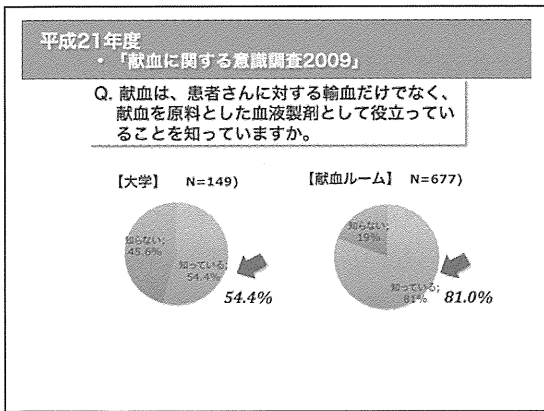
アンケート調査の対象は大阪府内の献血ルームの献血者および大阪府内に所在する2大学の学園祭の参加者 (主に若年層) である。大学祭でのアンケートには献血経験者用と未経験者用に2種類の質問票を用いた。



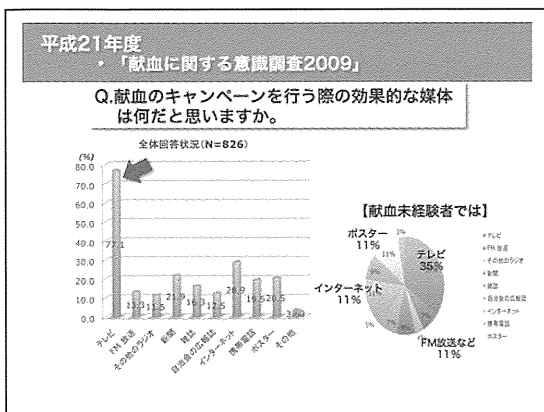
アンケート回答者は、大学祭では149人 (有効回答率 82.3%)、献血ルームでは677人 (有効回答率 90.3%) でいずれも6割が男性であった。また、大学祭における回答者の52.3%が献血経験のなかったのに対し、献血ルームにおける回答者の45.6%が31回以上献血をしていると回答した。



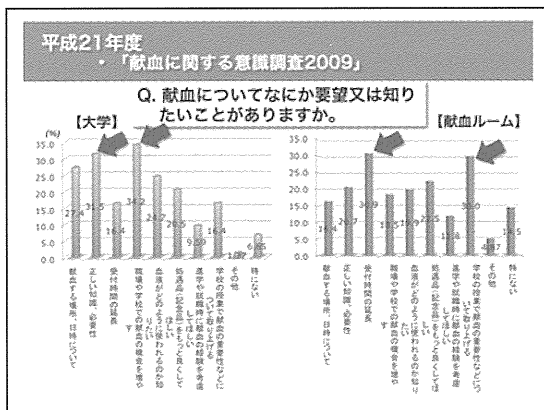
「若年の献血者数が近年減少している」ことへの認知度は、大学祭での献血未経験者では40%、献血経験者では60~75%であった。献血ルームでは10歳代を除くと年齢とともに増加傾向がみられた。



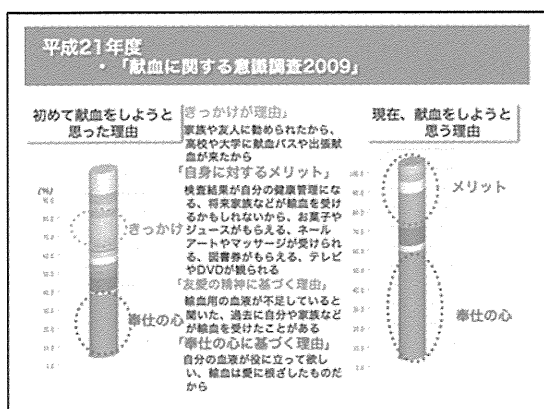
「献血は輸血以外にも血液製剤として役立っている」ことへの認知度は、大学祭では 54.4%であったのに対し、献血ルームでは 81.0%であった。



献血キャンペーンのための効果的な広告媒体に関する質問では、「テレビ」と答えた人が多く、全体では 77.1%、献血未経験者に限定すると 35%であった。



献血についての要望や知りたいことを聞く質問で多かった回答は、大学祭では「職場や学校での献血の機会を増やす」(34.2%)、「正しい知識、必要性」(31.5%)であり、献血ルームでは「受付時間の延長」(30.9%)、「学校の授業で献血の重要性などについて取り上げる」(30.0%)であった。



献血をする理由に関する質問を「きっかけ」、「自分自身に対するメリット」、「友愛の精神」、「奉仕の心」に分類すると、初めて献血をしようと思った理由はきっかけと奉仕の心を上げるものが多く、現在献血をしようと思う理由ではメリットと奉仕の心を上げるものが多かった。

平成21年度
・「献血に関する意識調査2009」

Q. 献血をしたことがない理由は？

- > 針を刺すのが嫌だから
- > 時間がかかりそうだから
- > 忙しくて時間がなかった
- > 献血ルームのイメージが暗い、何をしているのかわからない
- > 血液製剤として使われることを知らない

献血未経験者を対象とした献血をしたことがない理由に関する質問では「針を刺すのが痛そうだから」、「時間がかかりそうだから」、「忙しくて時間がなかった」のほかに「献血ルームのイメージが暗い、何をしているのかわからない」、「血液製剤として使われることを知らない」のように献血に関する知識がないことを挙げる者がいた。

平成21年度
・「献血に関する意識調査2009」 【まとめ】

- 献血未経験者に対して、献血に関する知識、イメージの不足
- 初めて献血の理由は、「友愛・奉仕の精神」と「きっかけ」
- 献血を継続する理由は、「友愛・奉仕の精神」と「メリット」
- 献血に関する情報や意義、献血に関する正しい知識を的確に提示することが必要
- 献血推進のための広報戦略は、献血経験の有無や年代によって効果的な媒体が異なるため、その集団特性に応じた戦略が必要
- テレビやイメージキャラクターを使ったポスターで、全国的にアピールした「はたちの献血キャンペーン」の認知度は、年代・性別を通じて、圧倒的に高かった
- 幅広い世代にアピールする力が強い方法、例えば、テレビやラジオ、街頭での呼びかけ、ポスターなどを使った活動が効果的と考えられた

以上から献血未経験者には献血に関する情報や意義、正しい知識を的確に提示し、きっかけを与えることが重要であり、有効な広報手段はテレビ、ラジオなど幅広い世代にアピールできる方法であると考えられた。

3年間の研究

平成21年度
・「献血に関する意識調査2009」
若年層において献血の促進因子や阻害因子は何か、また、どのような媒体を利用して普及啓発を助めていくことが効果的であるか

平成22年度
・「献血データの解析2010」
近年、若年層での献血本数が減少しているが、一方、少子高齢化のために若年層の人口が減少している。人口、地域を考慮した献血本数の解析を行う必要がある

平成23年度
・「献血データの解析2011」
年次別に見た献血本数の解析により、継続的に献血を行う集団あるいは、行わない集団の特性を明らかにし、献血推進のための基礎資料とする

2) 「献血データの解析 2010」

平成 22 年度は「人口、地域を考慮した献血本数の解析」を行った。少子化のために献血可能年齢の人口が減少しているため、仮に同じように献血を行っていても献血本数そのものは減少してしまうことが考えられる。そこで献血本数だけでなく単位人口当たりの献血本数も合わせて考慮した解析を行った。

平成22年度
・「献血データの解析2010」

【対象】

- ・ 2008 (平成20) 年度の全献血者 (N=5,137,612)
- ・ 2009 (平成21) 年度の全献血者 (N=5,303,431)

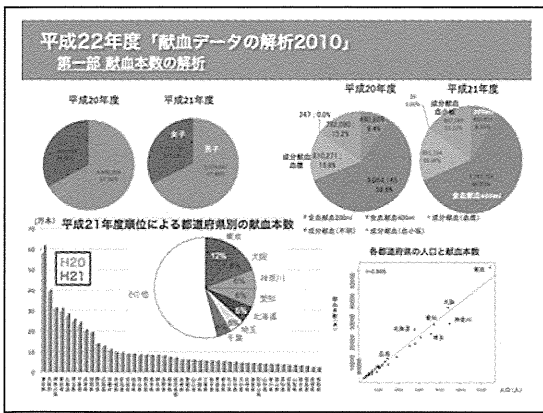
【解析項目】

- ・ 性別
- ・ 生年月日
- ・ 種類 /全血献血・成分献血
- ・ 初回・再来
- ・ 献血ルーム /採血都道府県
- ・ 採血年月日 採血月・採血時年齢 (16～69歳)

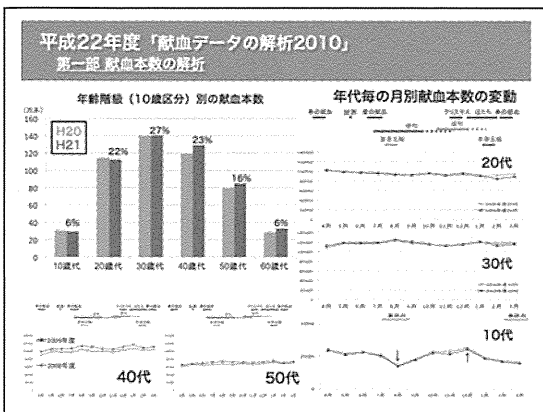
【結果】

- 【第一部 献血本数の解析】
- 【第二部 人口1000人あたり献血本数の解析】

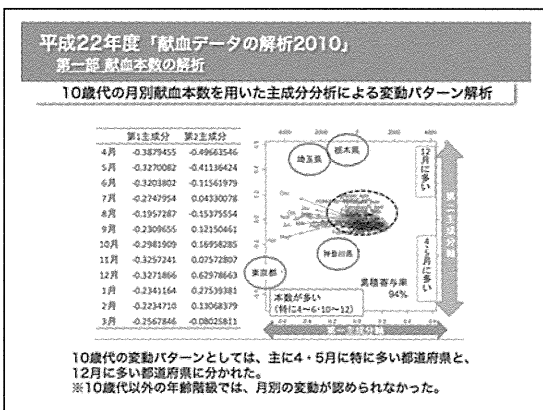
対象は平成 20 (2008) 年度と平成 21 (2009) 年度の全献血者である。



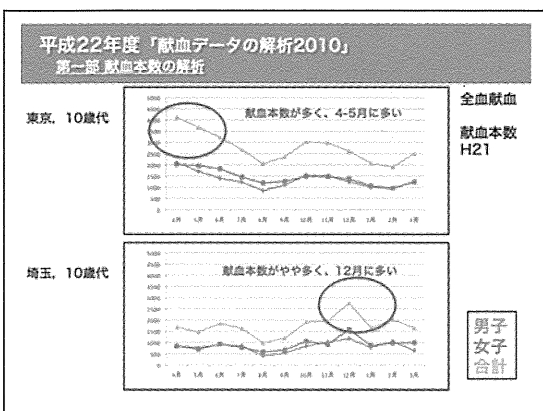
平成 20、21 年度ともに全献血の男女比は 2:1、全血献血と成分献血の割合 2:1 であった。また献血本数が多いのは東京、大阪、神奈川などの都市圏であった。人口を横軸、献血本数を縦軸にプロットした散布図によると、東京、大阪、北海道などは平均よりも本数が高く、神奈川、埼玉などは平均よりも本数が低いという結果になった。



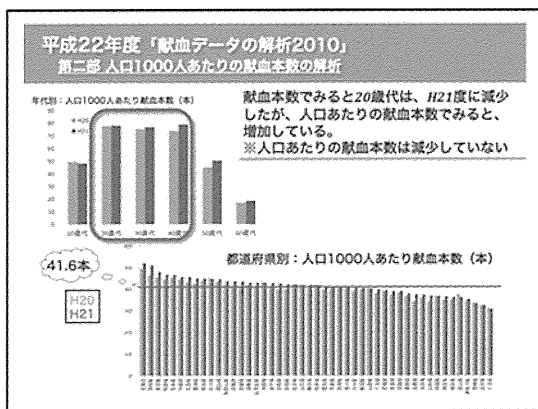
平成 20 年度と 21 年度で、年齢階級ごとに献血本数を比較すると 10 歳代・20 歳代では献血本数は減少、30 歳代以降の献血本数は増加していた。月ごとの献血本数の推移では 20 歳代以降はあまり大きな増減はみられなかったが、10 歳代では 8 月に少なく、4 月と 12 月に多くなる傾向がみられた。



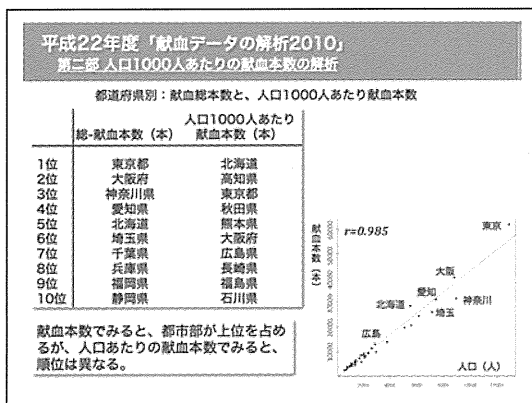
10 歳代の月別献血本数の変動パターンを主成分分析により解析すると、特徴的な都道府県は1学期・2 学期に献血本数が多い東京都、12 月に献血本数が多い埼玉県、栃木県、1 学期に献血本数が多い神奈川県であり、それ以外の都道府県には大きな違いはみられなかった。



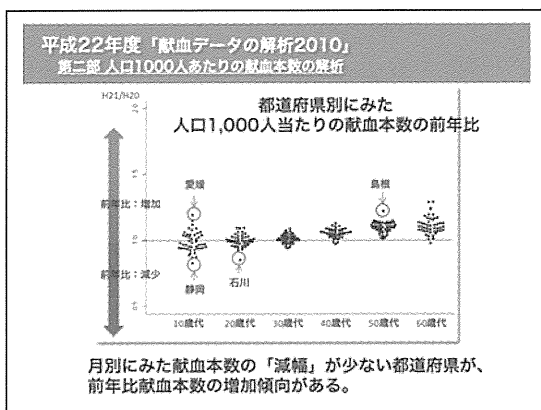
主成分分析の結果、特徴的だった東京都と埼玉県の月別献血本数をみると、確かに東京では 4・5 月にとくに多く、埼玉では 12 月に多くなる傾向があった。



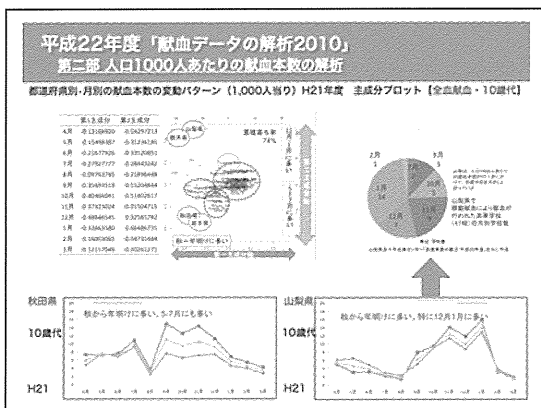
平成 20 年度、21 年度の年齢階級別にみた単位人口当たりの献血本数を比較すると、献血本数そのものは減少していた 20 歳代がわずかに増加していた。30 歳代以降の人口当たりの献血本数はいずれも増加しており、10 歳代は人口当たりの献血本数でもわずかに減少していた。全国平均は人口 1,000 人当たり 41.6 本であった。



都道府県別にみた献血本数と単位人口当たりの献血本数の順位を比較すると、献血本数では都市部が上位を占めていたが、人口当たりの献血本数では、これと異なり上位を占めたのは順に北海道、高知県、東京都であった。



平成 20 年度と 21 年度の単位人口当たりの献血本数の増減をみると、10 歳代では、愛媛県が最も増加率が高く、静岡県は減少率が最も高かった。20 歳代で最も減少率が高かったのは石川県であった。減少がみられた 2 県の人口当たり月別献血本数を見ると平成 20 年度に特異的に多い月があったのが、21 年度にはほかの月と同程度になっていた。40 歳代以降ではほとんどの都道府県で増加傾向がみられた。



変動パターンの解析を行うと都道府県により「1 学期に多い」、「12 月前後に多い」、「1 学期・2 学期に多い」、「秋に多い」などのパターンがあった。12 月前後に特異的に多い山梨県ではこの時期に集中的に学校献血を行っていた。

平成22年度「献血データの解析2010」
 第二部 人口1000人あたりの献血本数の解析

「人口1,000人当りの献血本数の増加」に影響を与える要因を探索するために、ロジスティック回帰分析を行った

項目	オッズ比	95%信頼区間	P値
前年献血本数	1.00	(1.00, 1.00)	0.150
10歳代本数	1.01	(0.95, 1.10)	0.712
20歳代本数	1.24	(1.05, 1.53)	0.023 *
30歳代本数	1.12	(0.90, 1.42)	0.310
40歳代本数	0.97	(0.72, 1.33)	0.849
50歳代本数	0.93	(0.58, 1.49)	0.758
60歳代本数	1.80	(0.98, 3.78)	0.079
第1主成分	0.34	(0.10, 0.82)	0.034 *
第2主成分	0.54	(0.12, 2.28)	0.391

第1主成分（=献血本数と同義）
 第2主成分（1～3月に多い/9～10月に多い）

◎前年比較で献血本数の増減と有意に関連した項目は、「20歳代の献血本数」と「第1主成分（献血本数）」。
 ◎前年の20歳代の1000人あたりの献血が増加すると次年の全献血増加に寄与することを表わし、20歳代への献血の働きかけが重要である。

人口1,000人当たりの献血本数の増加に影響を与える要因を探索するために、ロジスティック回帰分析を行うと「20歳代本数」が多いと次年度の単位人口当たりの献血本数が有意に増加し、「第1主成分」（ほぼ献血本数と同義）が多いと次年度の単位人口当たりの献血本数が有意に減少することが明らかになった。

平成22年度「献血データの解析2010」
 まとめ

1. 総献血本数はH21年度は減少したが、人口1000人あたり献血本数は10歳代を除き増加した
2. 月別の献血本数の減少幅が少ない都道府県が、前年比上昇傾向
3. H20年度の20歳代の献血本数が、H21年度の都道府県全体の献血本数の増加に寄与している。20歳代への献血の働きかけが重要であることを示唆している。
4. 10歳代の献血本数/人口1000人の月別変動には、学校行事と関連している（新学期、文化祭など）とも考えられ、学校との連携が必要であると考えられる。

単位人口当たりの献血本数は10歳代以外の年齢階級では増加しており、10歳代・20歳代の献血本数減少には少子化が大きく影響していることが明らかになった。また、20歳代献血本数が次年度の全体の献血本数増加に寄与しており、20歳代への献血の働きかけの重要性が示唆された。

3年間の研究

平成21年度
 ・「献血に関する意識調査2009」
 若年層において献血の促進因子や阻害因子は何か、また、どのような媒体を利用して普及啓発を助めていくことが効果的であるか

平成22年度
 ・「献血データの解析2010」
 近年、若年層での献血本数が減少しているが、一方、少子高齢化のために若年層の人口が減少している。
 人口、地域を考慮した献血本数の解析を行う必要がある

平成23年度
 ・「献血データの解析2011」
 年次別にみた献血本数の解析により、継続的に献血を行う集団あるいは、行わない集団の特性を明らかにし、献血推進のための基礎資料とする

3) 「献血データの解析2011」

平成23年度は「年次別にみた献血本数の解析」を行った。継続的に献血を行う集団の特徴について2年間を対象とした解析により探索し、5年間を対象とした解析により検証した。

平成23年度「献血データの解析2011」
 献血回数を経時的に変化する解析

【対象】

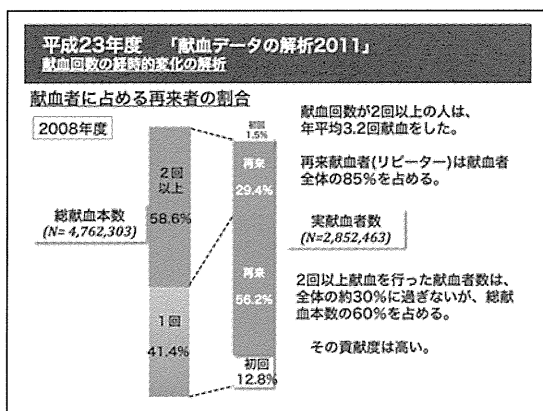
- ・2008（平成20）年度の全献血者（N=5,137,612）
- ・2009（平成21）年度の全献血者（N=5,303,431）

【解析項目】

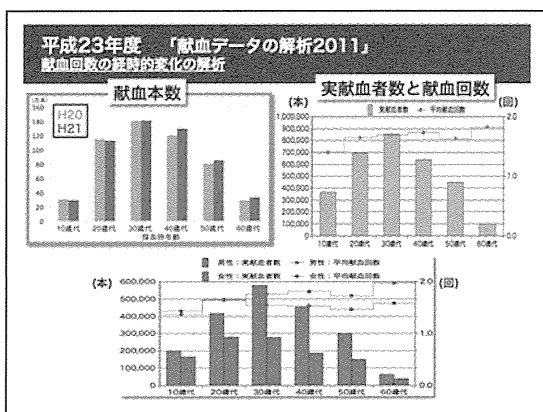
- ・性別
- ・生年月日
- ・種類 / 全血献血・成分献血
- ・初回・再来
- ・献血ルーム / 採血都道府県
- ・採血年月日 採血月・採血時年齢（16～69歳）

2008年度、2009年度の献血者データをIDごとに集計し、献血者ごとの年間献血回数を算出し、両年度間の経時的な変化を解析した。

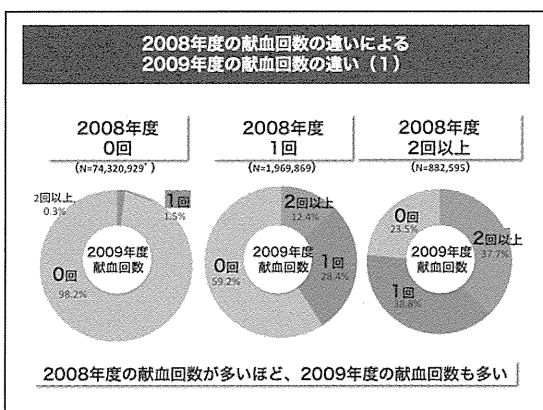
2年間を対象とした解析では、平成20年度と平成21年度の全献血者を解析対象とした。



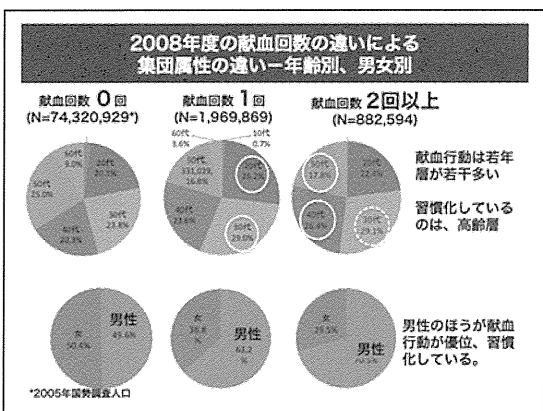
献血回数が2回以上の集団は年平均3.2回献血をしており、再来献血者(リピーター)が献血者全体の85%を占めている。また2回以上献血を行った献血者は全献血者の30%に過ぎないが、総献血本数の60%を占めており、その貢献度は高いと言える。



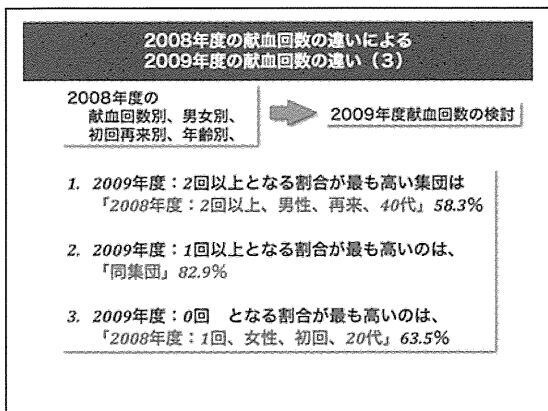
年齢階級別にみた実献血者数、献血回数を比較すると実献血者数が多いのは順に30歳代、20歳代、40歳代だったのに対し、平均献血回数が多いのは順に60歳代、40歳代、30歳代であった。



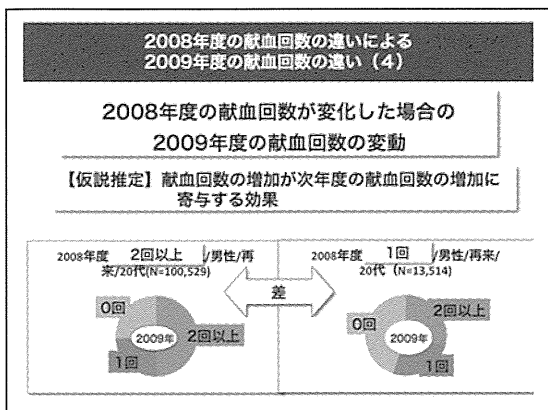
平成20(2008)年度献血本数ごとに平成21(2009)年度献血本数を比較すると、前年度の献血回数が多いほど、次年度の献血回数が多い傾向がみられた。



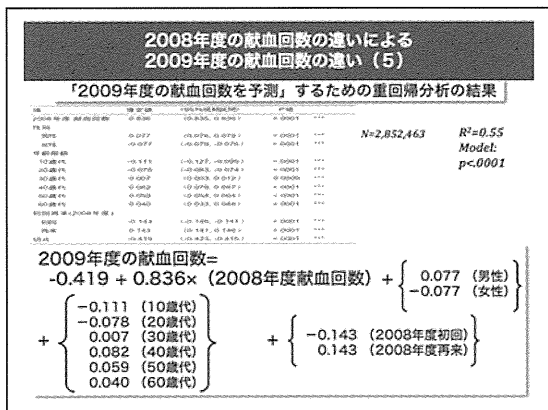
献血回数ごとの年齢分布をみると、献血回数1回の集団では20歳代、30歳代が多く、合わせて半分以上を占めるのに対し、献血回数2回以上の集団では30歳代、40歳代、50歳代上位を占め、合わせて75%を占めていた。また男女比をみると、献血回数が多いと男性の占める比率も高くなっていった。これらから献血行動が習慣化しているのが高齢層、男性であることが示唆された。



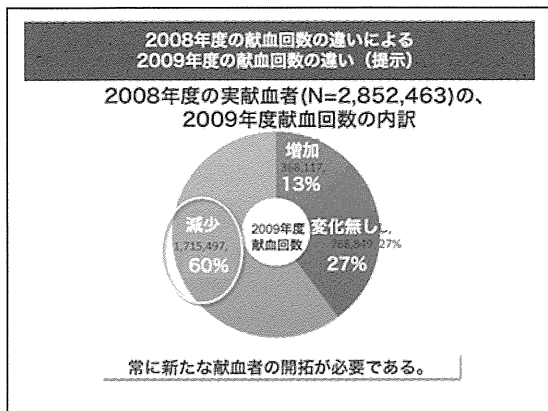
平成 20 (2008) 年度献血回数、男女、初回再来、年齢階級別に、平成 21 (2009) 年度献血回数を集計した結果から、次年度の献血回数が 2 回以上、1 回以上となる割合が最も高い集団は「2 回以上、男性、再来、40 歳代」であり、0 回となる割合が最も高い集団は「1 回、女性、初回、20 歳代」であった。



平成20年度献血回数が1回の集団の献血回数が仮に2回となったときに期待される、次年度の献血回数の増加数を男女、初回再来、年齢階級別に算出すると、増加数が最も大きい集団は男性、再来、60 歳代の集団であり、最も小さい集団は女性、初回、10 歳代の集団であった。



平成 21 (2009) 年度献血回数を目的変数とした重回帰分析を行った結果でも、同様に献血回数の多い集団の特徴は「男性、40 歳代、再来」であり、少ない集団の特徴は「女性、10 歳代、初回」であった。



平成 20 (2008) 年度献血者に対し平成 21 (2009) 年度献血本数の増減を調べると、60%が減少していた。このことは、献血本数確保のためには常に新たな献血者の開拓が必要であることを示している。

平成23年度 「献血データの解析2011」
 献血回数の経時的変化の解析

1. 若年層では献血行動に結びつく単発的な献血は多いが、習慣化した献血者はまだ少なく、高齢層では単発的な献血は少ないが、習慣化した献血者は多いと考えられた。
2. 男性は女性よりも単発的な献血、習慣的な献血ともに多いと考えられた。
3. 献血は回数を重ねるほど習慣化する。
4. 次年度の献血回数増加に最も効率よく寄与するのは「40-50代、男性、再来」である。
5. 総献血者数の確保には献血の習慣化のみならず、献血者の新規開拓も重要である。

➡ 初回献血者は初年度に少なくとも2回以上…

2年間を対象とした解析の結果、若年層では単発的な献血が多く、高齢層では習慣化した献血が多いこと、また回数を重ねるほど習慣化することが考えられた。また、次年度の献血回数増加に最も効率よく寄与するのは40・50歳代、男性、再来であった。

平成23年度 「献血データの解析2011」
 5年間の資料を基にH18年度（2006年度）献血者からみた献血継続率

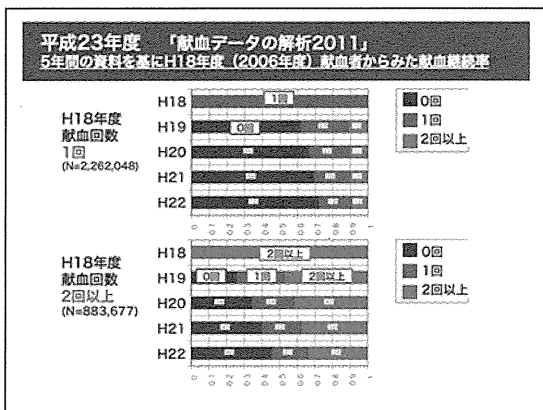
【対象】

- ・2006（平成18）年度の全献血（N=4,983,009）
- ・2007（平成19）年度の全献血（N=4,965,230）
- ・2008（平成20）年度の全献血（N=5,137,612）
- ・2009（平成21）年度の全献血（N=5,303,431）
- ・2010（平成22）年度の全献血（N=5,329,676）

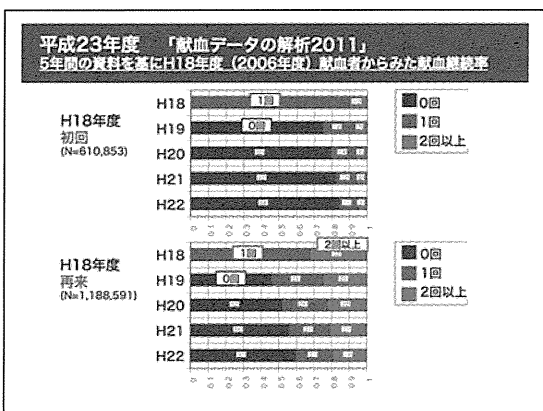
【解析項目】

- ・性別
- ・生年月日
- ・種類
- ・初回再来
- ・献血ルーム / 採血都道府県
- ・採血年月日 採血月・採血時年齢（16～69歳）

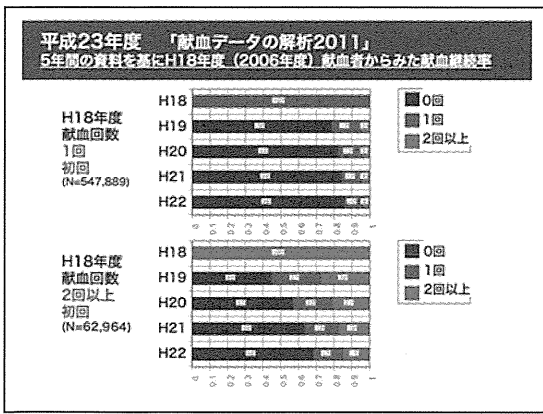
5年間を対象とした解析では、平成18年度献血者の次年度以降の献血本数に関する解析を行った。



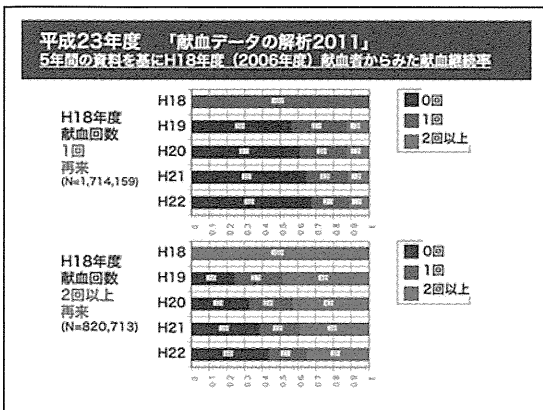
平成18年度献血回数別に献血回数の推移をみると、平成18年度献血回数1回の集団では4年後の平成22年度にも献血を行っていたものは3割以下であったが、献血回数が2回以上の集団では4年後に献血を行っていたものは半分以上いた。



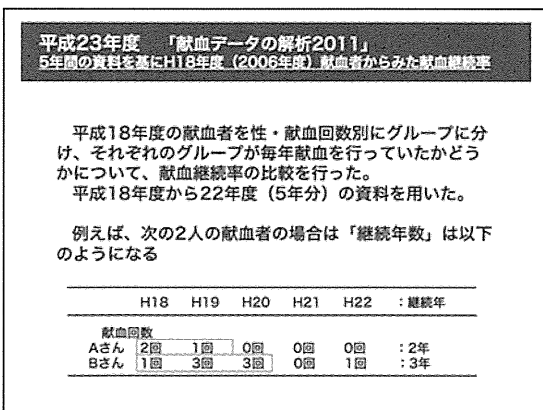
初回再来別に献血回数の推移をみると、平成18年度に初めて献血を行った献血者のうち、次年度も献血を行っていた者は3割以下で、4年後に献血を行っていた者は2割以下であった。一方、再来献血者では、次年度に献血を行っている者は半分以上で、4年後も献血を行っている者は4割以上いた。



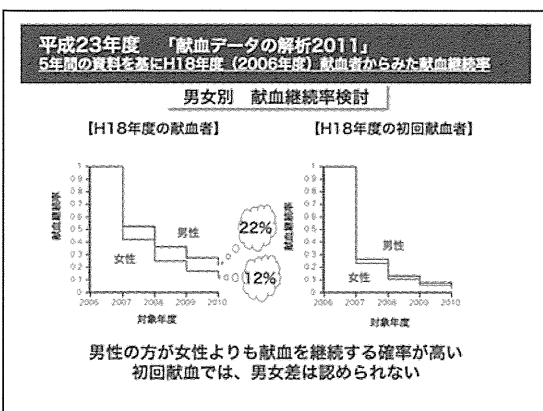
平成18年度の献血回数と初回再来別の層別に献血回数の推移をみると、献血回数は1回よりも2回以上の方が、初回よりも再来の方が次年度以降の献血回数が多い傾向があった。特に、平成18年度初回献血、献血回数1回の集団では、次年度において献血を1回以上していた者は2割強、4年後に献血をしていた者は1割強であったが、平成18年度再来献血、献血回数2回以上の手段では、次年度において献血を1回以上していた者の割合は7割強、4年後に献血をしていた者は半分以上おり、年度内に複数回献血をする献血者は献血活動が習慣化していると思われた。

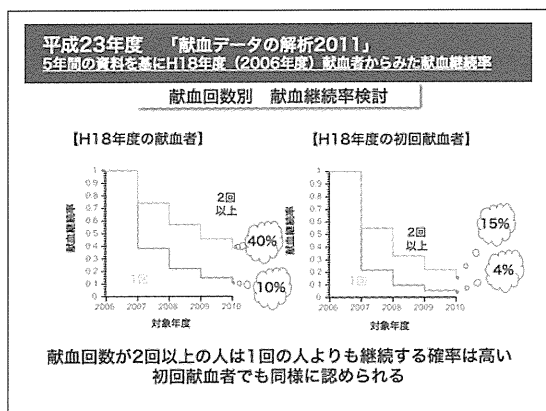


献血を継続して行っている集団の特徴を検証するため、平成18年の性・献血回数別にグループを分け、「献血継続率」を算出した。ここで、「献血継続率」は平成18年度以降で一度も献血をしなかった年度までの「継続年数」を生存時間解析における生存時間ととらえて、カプランマイヤー法により推定したものである。

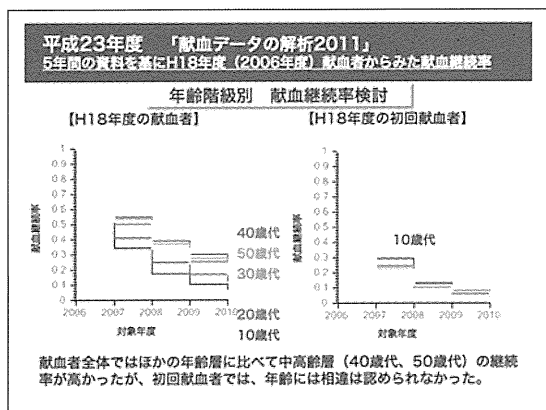


全献血者に対し男女別に5年継続率を算出すると、10%程度の差がみられたが、初回献血者だけの集団に対し男女別に5年継続率を算出すると、あまり性差はみられなかった。

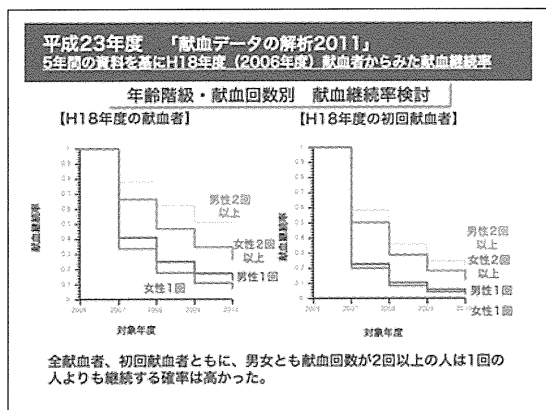




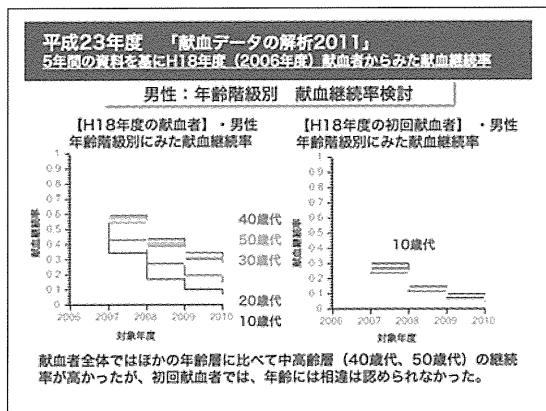
全献血者に対し平成18年度献血回数別に献血継続率を算出すると、2回以上献血を行った集団は1回だけの集団と比較して30%程度5年継続率が高かった。初回献血者に限定しても、献血回数2回以上の集団は献血回数1回の集団よりも継続する確率が10%程度高かった。



全献血者に対し平成18年度年齢階級別に献血継続率を算出すると、中高年齢層（40歳代・50歳代）の継続率が高かったが、初回献血者に限定すると、年齢階級による違いはほとんどみられなかった。



男女それぞれで、平成18年度献血回数別に献血継続率を算出すると、全献血者、初回献血者ともに、男女ともに献血回数が2回以上の集団は献血回数1回の集団よりも継続率が高かった。



男性で年齢階級別に献血継続率を算出すると、献血者全体では40歳代・50歳代の中高齢層の維持率が高かったが、初回献血者に限定すると年齢階級による差はあまりみられなかった。